

[045_2004]第45回附属図書館貴重文物展示：シーボルトが観た日本：NIPPON 初版本図版から

宮崎，克則
九州大学総合研究博物館：助教授

<https://hdl.handle.net/2324/7170846>

出版情報：展覧資料，pp.1-20，2004-05-10. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：



平成16年度開学記念展示会



第45回九州大学附属図書館貴重文物展示

シーボルトが観た日本

—NIPPON 初版本図版から—



2004. 5. 10

九州大学附属図書館（中央館・医学分館 共催）

目次

展示会開催にあたって……………	1
1. シーボルト『日本』……………	2
2. シーボルトについて……………	6
3. シーボルトの江戸参府紀行……………	8
4. シーボルトが見た日本の人々と風俗…	13
5. シーボルト 妻と娘と息子達……………	16
6. シーボルト事件顛末記……………	17
7. シーボルトの心残り —異国への想い—……………	18

展示会開催にあたって

九州大学附属図書館長

今 西 裕一郎

九州大学中央図書館では、昭和54年度から開学記念行事の一つとして、図書館および学内の各部署で所蔵する資料の中から選定して、貴重資料展示会（「貴重文物展観」と称した）を開催してきました。この展示会は、地域の皆様に九州大学の貴重資料を公開する事業として、これまで四半世紀にわたって開催し、今回で45回目を迎えます。

今回は400年を越える日本とオランダの交流の中、江戸時代においてわが国に西洋の科学を伝える重要な役割を果たしたオランダ医者と呼ばれた人々の中から、ドイツ人フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの日本紀行（オランダ商館長の江戸参府に絵師とともに随行）の中で生まれた『NIPPON』に焦点を絞り、「シーボルトの観た日本」というテーマで展示を行うこととしました。

シーボルトの『NIPPON』は、1832年から1851年までの20年間にわたり14回に分けて、オランダのライデンでシーボルトの自費出版により出版されたものです。367枚に及ぶ大版の版画集とテキストからなり、シーボルトが江戸に向かう道中で見た風俗を描いたものと言えます。写生したのは、随行していた絵師川原慶賀だといわれています。

ヨーロッパにおける当時の大部の版画集等の出版は、一括製本で出版されるのではなく、2,30枚単位で印刷して逐次購入者に届けられ、製本は購入者が好みに応じて行うというシステムであったようです。

医学分館で発見された今回展示の『NIPPON』は、その原初形態を示す未製本の状態でした。九州大学以外にも本書は福岡県立図書館、長崎県立図書館に所蔵されていますが、それらはいずれも製本された形です。

今回は、その未製本であることの利点を生かして、できるだけ多くの版画を展示することに努めました。全367図のうち約70点を以下のようなテーマにまとめ、御覧に入れます。

シーボルトの江戸参府紀行

シーボルトが見た日本の人々と風俗

シーボルト 妻と娘と息子達

シーボルト事件顛末記

シーボルトの心残りー異国への想いー

シーボルトと医学（このテーマのみ、会場は医学分館）

なお、5月15日(土)午後2時から、今回の展示に因んで、シーボルト研究の泰斗、長崎純心大学教授宮坂正英氏の「日本情報編集者としてのシーボルト」、および本学総合研究博物館助教授宮崎克則氏の「“再発見”シーボルト『NIPPON』」と題する公開講演会を開催いたします。ふるって御来場ください。

平成16年5月10日

1. シーボルト『日本』

宮崎 克則

シーボルト (1796—1866 在日期間1823—1829)

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、1796年にドイツのヴェルツブルクで誕生した。彼は、文政6年(1823)、長崎の出島にあったオランダ商館の医者として来日し、翌年には長崎郊外の鳴滝に塾(鳴滝塾)を設け、実地診療のかたわら高野長英ら数十名の門下生に医学・博物学などを教え、洋学の発展に貢献した。彼は、日本とその周辺地域の調査・研究を行い、ヨーロッパにおいて紹介する。



シーボルト『日本』

シーボルトは、帰国後『日本』を出版し、ヨーロッパに日本を紹介した。『日本』には、当時の日本国内でも重要機密として公表されていなかった伊能忠敬の調査に基づく日本地図などが紹介され、また農村や都市の風景・風習、さらには日本の武器や軍事訓練の様子などが詳細に絵画として描かれている。

文政11年(1828)、シーボルトが帰国しようとしたとき、暴風雨が長崎を襲い、座礁したハウトマン号から日本地図など国禁の品々が発見された(シーボルト事件)。シーボルトの弟子や友人は刑に処せられ、彼自身も国外追放となり、1829年12月に長崎を離れる。

医学分館の『日本』

医学分館の3Fにある展示室に、大正15年に医学部法医学教室が購入した『日本』の一冊が展示されていた。それには十数枚の図版があるだけであり、「もっとたくさん他にあるはず」と調査を依頼した結果、書庫の奥から残りの図版が大量に見つかった。

『日本』に収録された図版は、総数367枚であるが、医学分館に残る分は4枚ほどが所在不明となっている。それらは、図版の通し番号も提示すると、

113号 京都の全景

123号 江戸の全景

361号 蝦夷海峡—最上徳内の原図による

367号 付図 日本人の作成による原図および天文観測に基づく日本地図—九州、四国および本州である。

『日本』は、1832年から1851年の20年間にわたり、14回に分けてオランダのライデンで出版され、配本された。シーボルトの自費出版で出された『日本』は、当初は200部ほど、最後は60部が出されたにすぎなかった。

当時の出版は、製本されて出されるのではなく、分冊で出され、後に購入者がそれを製本所に持



『日本』図版の第1分冊



ち込み、自分が気に入った表紙を付けて製本するのが一般的であった。医学分館の『日本』は、初版本であり、しかも製本されていない。そのことは、左の写真が如実に物語っており、一枚一枚に製本された形跡がない。

シーボルト『日本』の初版本を所蔵するのは、近くでは福岡県立図書館や長崎県立図書館などである。しかしそれらは製本されている。左の写真は東京の財永青文庫が所蔵する『日本』であり、丁寧に装丁されている。

九大本の『日本』は未製本であり、出版当時の様子をそのままに伝えている、世界的にも数少ない極めて貴重な例であると思われる。

思われる。

『日本』は決して良好な保存状態にあったとはいえず、ビニール袋に入れて保管されているにすぎなかった。現在、医学分館によって適切な措置が講じられ、ばらばらだった図版の順序も整理され、通し番号も付された。

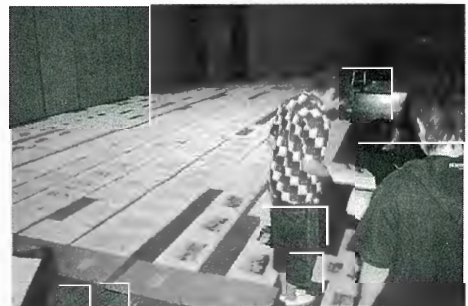
平成14年8月、本学50周年記念講堂にて、『日本』図版を順に並べ替える作業を行った。大量だったため、記念講堂のステージをはみ出すほどであった。並べ替えた後は、今後の混乱を防ぐために、通し番号を付けた和紙を、それぞれ裏に貼り付けた。

現在は、分冊ごとに中性紙の箱に入れ、図版1枚ごとに紙を挟んで保管している。カビのある図版もあり、それらを除去する作業もしなければならないが、予算上の問題から今後の課題として残っている。

以下、『日本』の中からいくつか紹介しよう。



見つかった当初の状態



日本境界略図（通し番号1）

当時、ヨーロッパでは日本の地理の全貌をつかんでいなかったため、シーボルトは江戸へ行ったとき、幕府天文方の高橋作左衛門景保から精密な日本地図を入手した。いくつかの地図はシーボルト事件において押収されたが、これはシーボルトによってヨーロッパに持ち帰られ、『日本』で紹介された。

この地図において、北海道の姿は、伊能忠敬の実測地図を採用し、樺太の部分は1808年に派遣された間宮林蔵の探検の成果を取り入れている。原図は高橋景保の作であり、樺太を島とする間宮海峡が記入されていた。その名称をシーボルトも採用し、「Mamiya(seto)1808」として広くヨーロッパに伝えた。伊能図などをもとにした日本地図は、国内でも公開されていなかったから、ヨーロッパの方が早く日本の形状を知っていたことになる。



NAGASAKI (通し番号12)

左図はオランダ船や中国船、そして日本の和船が出入りする物資の集積地である長崎の港を描いている。シーボルトの解説文によると、長崎は山と海が迫りきわめて多彩な風景であると記している。しかし、人口密度が高く、耕地を拡大するために山や森を伐採したりするので、野生の哺乳動物をあまり見かけないとも書いている。

シーボルトの専属カメラマンは、日本人絵師の川原慶賀であった。慶賀は、長崎洋画派として

洋風表現を身につけており、美術的才能はそれほどでなかったが、写実にきわめて秀でていたため、シーボルトの信任も厚かった。シーボルトは、風景・植物・動物など目にとまるものを写生させ、帰国後にそのスケッチをもとに石版画を作らせ、『日本』の図版とした。



『日本』のテキスト編

『日本』はテキスト編と図版編からなり、医学分館にはテキスト編も揃っている（左図）。全体は7部構成となっているが、第1部第1節から順次出されたのではなく、シーボルトの整理がついた部分から出版されたので、テキスト編の第1分冊には、第1部と第3部の一部が出されている。

テキスト編は、分冊によってはページの終わりの文章が中断していたり、記述の順序が乱れ

ていたりする。『日本』を購入した人々は、それぞれの考えによって、テキスト編を配列しなおし製本したから、現存する『日本』に細部まで同じものはないといわれる。九大本はテキスト編も未製本であり、その価値はきわめて高い。

『日本』図版の内容

第1分冊には、全体に対する口絵と裏表紙、そして14点の図版が収録されている。長崎や出島での風景をスケッチしたものやその地図、日本および周辺諸国の地図などが収録されている。

第2分冊には、日本各地の山々のスケッチを中心とする20点の図版が収録されている。シーボルトが見ていない山々も多く描かれており、何をネタ本としたのか興味深い。

第3分冊には、長崎においてシーボルトと関係を持ったと思われる人々のスケッチなど22点の図版がある。

第4分冊には、石器時代から江戸時代までの武器・防具および兵士や戦いの様子を描いた31点がある。

第5分冊には、旅行諸道具のスケッチとともに、長崎から江戸までの参府旅行途中の日本各地の名所・風景のスケッチなど36点が収録されている。ただし、「京都の全景」と「江戸の全景」は欠け

ている。

第6分冊には、町人・農民・天皇・将軍などさまざまな身分の人々を中心に描いた26点が収録されている。

第7・8分冊には、当時の生活諸道具や礼儀作法、冠婚葬祭に関する場面が描かれた24点がある。

第9・10分冊には、1年間のさまざまな節句や祭礼、仏殿・屋敷などの建造物、鷹狩りなどの31点がある。

第11・12分冊には、神武天皇の事績・歴代天皇、鎌倉～江戸にかけての歴代将軍、時計・暦、勾玉・金環などの考古学的遺物や貨幣といった、17点がある。

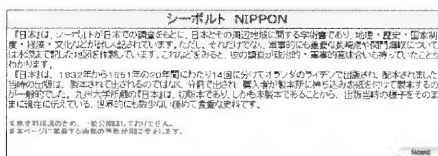
第13・14分冊には、日本の度量衡・花器・楽器など、日本の文化に関する27点の図版がある。

第15分冊には、仏教に関するもので、仏教各宗の祖師や釈迦および仏教の神々を描いた30点がある。

第16分冊には、寺院・神社、僧・神主の姿などの宗教に関する36点の図版がある。

第17・18分冊には、農業・農具、職人の諸道具、狩猟・漁業など産業を描いた図版が16点ある。

第19・20分冊には、朝鮮の人々や服装、蝦夷・樺太の人々、蝦夷・樺太・琉球・日本の地図など31点がある。



(みやざきかつのり 総合研究博物館助教授)



表紙 (一)	町人の服装 (124)	町人の服装 (125)	礼装 (126)	礼装 (127)	従者老連れた身分の清い日本人 (128)
上流の婦人 (129)	1 貴族の少年と少女 2 散歩する少女 (130)	1 商人 2 農民 (131)	農民 (132)	商人の服装 (133)	帝(天皇) (134)
后(皇后) (135)	公家の宮廷服 (136)	公家の宮廷服 (137)	公家の宮廷服 (138)	公家の宮廷服 (139)	公家の宮廷服 (140)
帝の側室 (高中の女官) (141)	将軍 (徳川家斉) (142)	将軍の御台所 (143)	武家の礼装 (144)	大名の妃 (145)	化粧 (146)

『日本』図版 第6分冊

2. シーボルトについて



シーボルト像 (E. キオソネ筆)
写真提供：シーボルト記念館

Philipp Franz von Siebold (1796年～1866年、在日期间：1823年～1829年)

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、1796年にドイツの学園都市ヴュルツブルクで誕生しました。

シーボルトの家は代々医学者でよく知られた家柄で、祖父のカール・カスパルはヴュルツブルグ大学医学部教授、父のヨハン・クリフトフも同大学の医学部教授でしたが、シーボルトが僅か二歳の時に世を去ったので、母のアポロニアと共にヴュルツブルグ近郊のハイディングスフェルトにある母方の伯父フランツ・ヨゼフ・ロツツ神父の家に引き取られて育てられました。

シーボルトは1823年(文政6年)、長崎の出島にあったオランダ商館の医者として来日し、六年あまりの滞在期間中に、膨大な資料や文献を収集し、高野長英などその当時日本における第一級の門人蘭学者たちの協力も得て、日本や周辺地域の地理・歴史・民族・言語・社会・経済・宗教・文化から動物・植物に至るまで、熱心に観察研究しました。

その間江戸参府にも上って、長旅の間、沿道各地において接した日本人の風俗・生活・風物などを仔細に観察しましたが、その研究熱心のあまり、国禁にふれて追放の憂き目にあい、余儀なく帰国しなければなりませんでした。

しかし、その後も滞在中に得た豊富な実地見聞と緻密な研究成果の整理に打込んで、後年『日本』を著しました。

シーボルトは科学的な総合調査にもとづいて、ヨーロッパに日本を紹介した最初のヨーロッパ人です。

シーボルト『日本』

シーボルトの研究成果は、後に、三つの大きな書籍として出版されました。その一つが代表作となった『日本』です。シーボルトはこの中で、日本をさまざまな角度から総合的に調査し、科学的なデータに基づいて紹介しようと努めました。そのため、当時の日本国内でも重要機密として公表されていなかった伊能忠敬の調査に基づく日本地図など日本の地理、歴史、風俗、政治、経済、宗教、芸術、学問、日本の近隣諸国の情報など、幅広い分野を網羅しています。

『日本』は1832年から1851年までの約20年の間に、20分冊にわけて仮綴本のかたちで14回にわたって発行配布されています。実は22分冊の予定で、その予告までしたのですが、最後の2分冊は刊行されませんでした。その意味では『日本』は未完成です。当時の大型の刊行物がそうであったように『日本』もシーボルトの自費出版で、予約形式をとっています。最初は200部ほど、最後はわずか60部を刊行したにすぎませんでした。

『日本』は、分冊によってはページの終りで文章が中断していたり、記述の順序が乱れていたり、図版に着色のものと着色でないものがあったり、そのうえ分冊をまとめて製本する過程で、さら

に順序配列がまちまちとなっていたり、現存のものでは、細部まで同じものはないと言われています。

このようにシーボルトの『日本』は未完成のうえ、内容や編集技術のうえで大小の粗漏、欠点があるにしても、大局から見れば、『日本』はそれまでの日本に関するどの著作より広汎で詳細であり、そしてずっと正確です。

シーボルトはこの著作で、日本をできるだけ正確に読者に伝えるため、図版をふんだんに取り入れることにしました。また、数多くの日本の原資料をそのまま掲載することで、各分野のヨーロッパの研究者たちがこの著書を資料として利用できるように配慮しました。そのため、『日本』はページ数が増え、また、紙質もいいものを使用しなければなりません。出版には多くの資金を必要としたので、シーボルトは、出版にかかる費用を確保するため、ヨーロッパ各地の国王や貴族・富豪を訪問し、協力を依頼しました。このような努力にもかかわらず、出版費用は十分に集まりませんでした。

そのため、最後の2分冊は未刊のまま終わっています。

『日本』以外にも、日本の動物・植物を科学的に分類してヨーロッパに紹介した『日本植物誌』（フローラ・ヤポニカ）や『日本動物誌』（ファウナ・ヤポニカ）を出版しています。この二つの著作は、シーボルトが単独で出版したものではなく、当時の各分野におけるヨーロッパでの第一人者であった研究者たちと共同で出版したものです。

『日本』初版本の正式な書名はつぎのとおりです。

NIPPON

ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG VON JAPAN UND DESSEN NEBEN-UND SCHUTZLÄNDERN : JEZO MIT DEN SÜDLICHEN KURILEN, KRAFTO, KOORAI UND DEN LIUKIU-INSELN, NACH JAPANISCHEN UND EUROPÄISCHEN SCHRIFTEN UND EIGENEN BEOBACHTUNGEN BEARBEITET.

九州大学附属図書館医学分館の『日本』

シーボルト『日本』に収録された図版は、総数367枚ですが、大正15年に医学部法医学教室が購入した医学分館の『日本』は4枚ほどが所在不明となっています。

当時の出版は、製本して出すのではなく、分冊で出し、後に購入者がそれを製本所に持ち込み、自分が気に入った表紙を付けて製本するのが一般的でした。

医学分館の『日本』は、初版本であり、しかも製本されていません。シーボルト『日本』の初版本は、近くでは福岡県立図書館や長崎県立図書館などにも所蔵していますが、それらは製本されています。

九大本の『日本』は未製本であり、出版当時の様子をそのままに伝えている、世界的にも数少ない極めて貴重な例であると思われます。



九大本 第1分冊表紙

3. シーボルトの江戸参府紀行

シーボルトが日本にいたころ、出島のオランダ商館長は対日貿易のお礼として、四年に一度江戸に上って将軍に拝礼する慣習がありました。シーボルトは、日本のさらなる情報を集めるためにこの機会を利用し、商館長ヨハン・ウィレム・ドゥ・スチュレルに随行します。その道中の名所や風景を、同行させた絵師に描かせています。

1826年（文政6年）2月15日長崎を出発したこの旅は、同年7月7日に帰りつくまで、往路55日、復路51日。江戸滞在の37日を含み、実に143日にも及ぶものとなりました。

1826年の江戸参府行程

2月15日 出島出発



彼杵村付近から大村湾を望む景

16日 大村

17日 武雄嬉野と武雄の温泉を観察



オランダ使節団の行列



嬉野温泉 浴場の表と裏から



小倉 引島を望む景

22日 小倉一下関

下関滞在

3月2日 下関出帆 関門海峡を「ファン・デル・カペレン海峡」と名づける

4日 牛の首崎に上陸

7日 日比一室 室上陸

9日 室一姫路

13日 西宮一大阪

大阪滞在

17日 大阪一伏見

18日 伏見一京都

京都滞在

25日 京都一草津

30日 池鯉鮒一矢矧橋一吉田

4月2日 掛川一大井川一藤枝 大井川を渡る

7日 沼津一箱根一小田原 富士山の標高を観測

10日 川崎一品川一江戸

江戸滞在 宿は日本橋本石町長崎屋
5/111代将軍家斉に謁見



ファン・デル・カペレン海峡の景（関門海峡）



永代橋から江戸の港と町を望む

5月18日 江戸一川崎

21日 小田原一三島

24日 府中一日坂

28日 宮一桑名一四日市

30日 関一石部

6月1日 大津一京都

京都滞在 清水寺、三十三間堂などを見学

7日 京都一伏見一大阪

大阪滞在 芝居『妹背山女庭訓』を見学

14日 大阪一西宮

15日 西宮一兵庫

乗船延期のため兵庫滞在

19日 兵庫出帆

船中

28日 下関

30日 下関一小倉

7月3日 田代一牛津

5日 嬉野一大村

7日 矢上一出島

シーボルトの図版について

シーボルト『日本』にある図は何を参照に描かれたものか。シーボルトは「これは〇〇という本からとった」という説明はしておらず、ただ「この図は△△を表しているのだ」としか述べていません。

特に『日本』にある山々の図は、シーボルトが実際にその地を訪れて描かせたものではなく、富士山を除いて谷文晁の「名山図譜」を参照したことが分かっています。

同じ山を描いた絵でも、シンプルな線で描かれた「名山図譜」と肉厚に影をつけられた『日本』の山の違いを比べて見てみると、とても興味深いです。

例えば「霧島山」(図下段)では山の頂から立ちのぼる噴煙が流れる方向が、逆を向いています。



谷 文晁 「霧島山」日本名山図絵より



KIRISIMA - JAMA.

『日本』の霧島山



谷 文晁 「阿蘇山」日本名山図絵より



ASO - JAMA.

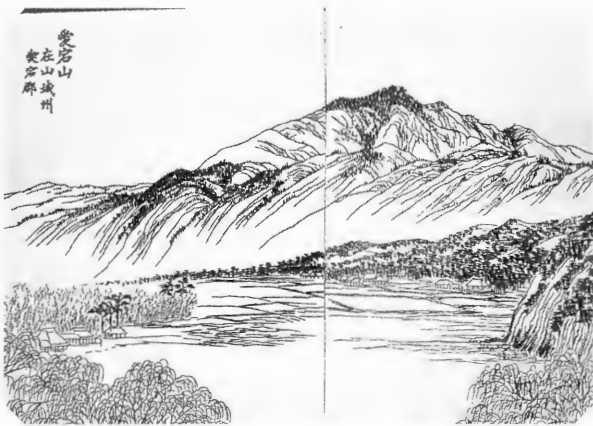
『日本』の阿蘇山



谷 文晁 「雲仙岳」日本名山図絵より



『日本』の雲仙岳



谷 文晁 京都「愛宕山」日本名山図絵より



『日本』の愛宕山



(写真左)『日本』の図版の最上徳内 (写真中) 蝦夷海峡 一最上徳内の原図による一
 (写真右) 蝦夷と日本領千島地図一高橋作左衛門の原図一 (右下は最上徳内の原図による厚岸湾と津軽海峡)

シーボルトの老友 最上徳内

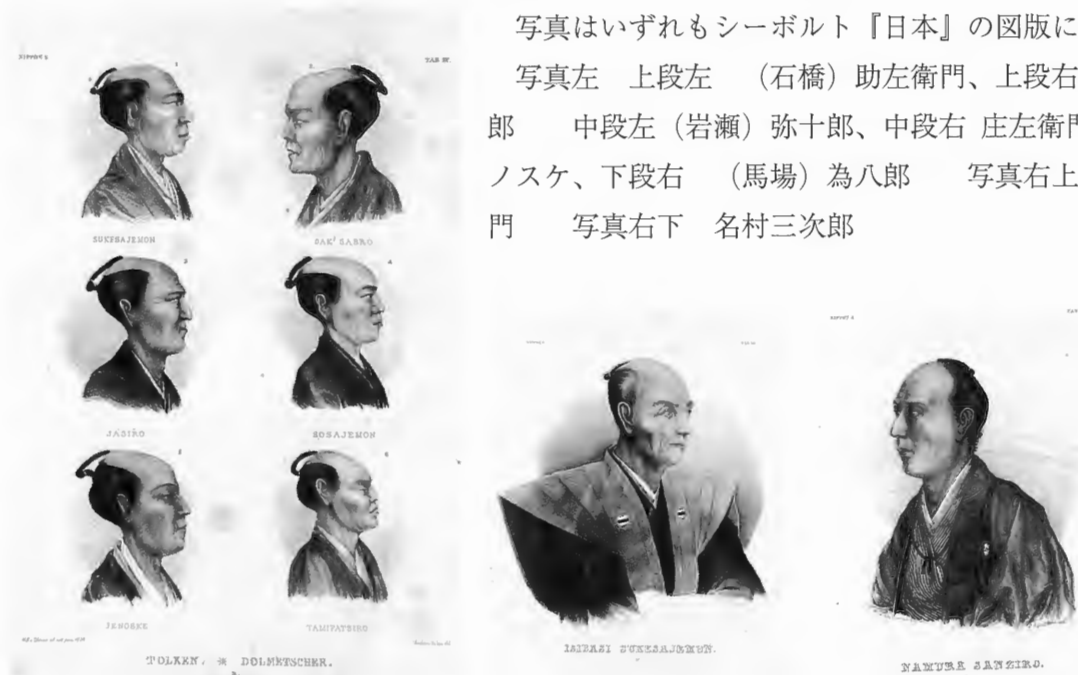
1785年から1809年まで9回にわたり、蝦夷地や北方領土を探検。近藤重蔵らと初めてエトロフ島に上陸し「大日本恵登呂府」の標柱を建てました。

シーボルトは徳内の豊富な経験と学識を頼って江戸で相まみえました。その時徳内は73才、シーボルトは30才でした。シーボルトはこの老友をえて蝦夷地・樺太のことについて信頼すべき学問上の知識を得ました。その著書『日本』に徳内が作成した北方地図を掲載し、「18世紀における最も傑出した日本の探検家」として最大級の言葉でほめたたえています。

シーボルトの活動を助けた通詞達

シーボルトの江戸参府旅行中、同行した江戸番通詞の役割は極めて大きなものでした。この通詞グループはシーボルトの門人ともなった江戸番大通詞末永甚左衛門を中心に、シーボルトに好意的に振る舞った面々であったことが察せられます。

写真はいずれもシーボルト『日本』の図版にある通詞達
 写真左 上段左 (石橋) 助左衛門、上段右 (中山) 作三郎
 中段左 (岩瀬) 弥十郎、中段右 庄左衛門、下段左 エノスケ、下段右 (馬場) 為八郎
 写真右上 石橋助左衛門
 写真右下 名村三次郎



4. シーボルトが見た日本人の人々と風俗

もともと極東への関心が高かったシーボルトは、1823年の初来日以降、日本国内で接した日本の風俗・文化に対し多大な興味を抱き続け、2度にわたる日本滞在期間中に門人たちの協力も得て、それらに関する徹底的な記録と関連資料の収集に努めました。

特に商館長の江戸参府に同行した際には、入念な下準備のうえにお抱え絵師をも同行し、各地で測量を含め興味を引かれたありとあらゆる事物を記録しています。

彼が収集した日本で使用されていた日用品、各種職業で使われていた道具などは、ヨーロッパにおいて博物館収蔵品として今日まで保存されてきたため、他に類の無い、当時の日本の生活を今に伝える貴重な資料群となっています。

1) 容 貌



NIPPON II. TAB. I. b.

1. Auge eines jungen Japaners, s. a. 6 ; 2. Auge eines jungen Kooraiers ; 3. Auge eines Schinesen ; 4. Auge eines jungen Buggisen von Gelebes ; 5. Auge eines jungen Daijak, Ureinwohner von Borneo ; 6. Auge eines jungen Japaners, s.a. 1.

眼と瞼

1. 若い日本人の眼 2. 若い朝鮮人の眼 3. 中国人の目 4. セレベスの若いブギース人の眼 5. ボルネオ原住民若いダイヤクの眼 6. 若い日本人の眼

「図表中の1は若い日本人の目で、その構造は6に示されたスケッチによって明らかにされよう。6の中のa・b・cは、上まぶたの皮膚のひだが、内側の眼角（cの所）で下まぶたの方へ下がっているのを示す。眼軟骨dは、bのところでは前述の皮膚のひだの下に後退し……」

(シーボルト「日本」図録第1巻 雄松堂書店 1978年より)

2) 服 装



公家の宮廷服

NIPPON II. TAB. XIII. e.

HOFDRAGT D KUGE. HOFTRAHCT. D. KUGE.



NIPPON II. TAB. XVII. e.

BIJWIJVEN VAN DEN MIKADO. NEBENWEIBER DES MIKADO. J. Erxleben.
帝の側室（宮中の女官）

「三月十九日……夜、宮廷の高位の人物がお忍びで、われわれヨーロッパ人を見にやってきた。この人は小倉中納言 (Okura Tsunagon) といって五十五歳、息子と娘がいっしょだった。使節が出迎える。彼は婦人のように歯を染めていた。これは天皇の宮廷における貴族の風習である。宮廷の衣裳の正確な絵はⅡ第13図(e), Ⅱ第17図(e)図に示す。」

(シーボルト「日本」第3巻 1826年の江戸参府紀行 雄松堂書店1978年より)

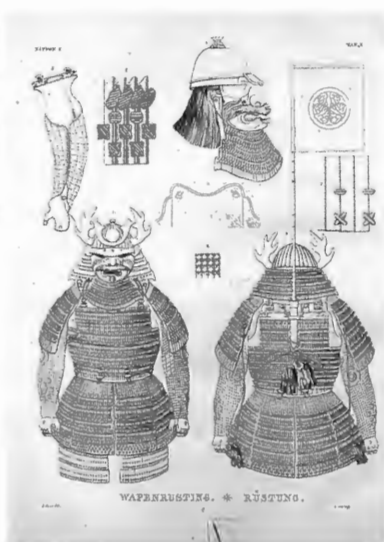
3) 武 具

NIPPON II. TAB.I. c.

WAPENRUSTING. RÜSTUNG. L. Nader ad nat. et in lap. del. e collect. de Siebold.



武装



武装

NIPPON II. TAB.II. c.

WAPENRUSTING. RÜSTUNG. L.

Nader del. e mus. reg.

(兜について)

「Ⅱ第1図(C)と第2図(C)には、甲冑が一揃い描かれてある。第1図(C)の1は天皇の宮廷の筆頭軍務大臣 (大将) の甲冑がモデルである。兜には竜頭が見える。(中略) 高官だけがつけるものである。この兜のその他の装飾も、この太陽神の後裔で宮廷における高位の人だけに許される象徴である。…」

(鎧について)

「鎧も兜に劣らず複雑で、次に示す部分から成り立っている。もっとも重要な部分は胴鎧(前後)である。これは腰板のついた胴鎧で、2種類に分けられる。(中略) 胴鎧には胸と背の部があり、右側が開き、身につけるときは紐で締める。(中略) 両肩は特別な副木(袖)で守られ、これは上腕をもすっきりおおう。また革製の袖(籠手)は鉄線美しく編んだもので、ここには金のボタンや装飾もつき、腕と手をおおう。(Ⅱ第2図(C)の5, 8)」

(シーボルト「日本」図録第2巻「武器・武術・戦術について」[原題 民俗と国家—武器・武術・戦術について](雄松堂書店) 1978年より)

4) 道 具



NIPPON IV. TAB. II. a.

MAAT EN GEWIGT. MASS UND GEWICHT. L.Nader del.

度量衡

「尺による物尺用具として曲尺・曲金とよばれるものがある。これは下部を直角に曲げたもので、芸芸化家や職人たちはおおむねこの形のものを使用する。(第2図(a)の1, 2)。(中略) 升(中国音 Sching)。マスともいう。一升・一マスという単位を、オランダ人たちは Gantang と呼んでいるが、日本流の1/16立方フット、つまり0.01738645立法メートルに当る。(中略) 普通に使われている枡をIV第2図(a)に図示した。3は一合枡、5は一升枡、6は斗枡である。…。秤には二種類がある。すなわち早や秤と、二個の皿をもつ普通秤である。…」

(シーボルト「日本」第4巻「日本の度量衡と貨幣」(雄松堂書店)1978年より)

5) 蝦夷・樺太



NIPPON. VII TAB. XVI.

JEZO. (CAP SOJA). AINO EN HUNNE WOONINGEN. AINO UND IHRE WOHNUNGEN.

蝦夷(宗谷岬) アイヌとその住居

アイヌ絵は、シーボルトが日本から持ちかえった絵巻あるいは軸物から構図をとり、人物に陰影をつけるなど洋画風に描いたものである。(中略) 図中の人物は集成図で、大きく描かれている木皮を綴った狩猟着(hayokpe)をつけている男夷はシーボルトの御用画家

川原慶賀(Tayoski)の模写(軸物)、右方の出獵の男女夷は無落款の軸物、中央の酒宴中の男夷四人・給仕の女夷一人と左方の出獵の男女夷は松前春里の絵巻の二場面からとられている。

(シーボルト「日本」解説 覆刻版 監修：斉藤信 講談社発行1975年より)

5. シーボルト 妻と娘と息子達

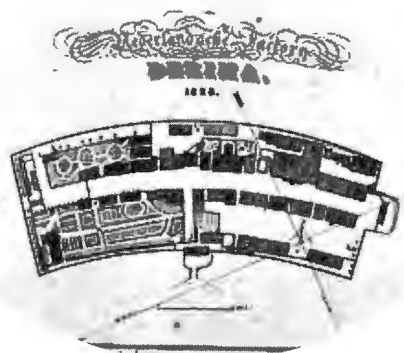
シーボルトはオランダ商館の医師として日本にやってきます。そして彼は、長崎で日本人の女性と恋に落ち、女兒を一人もうけます。彼の愛した日本人女性の名は“オタキ”。シーボルトは日本で見つけた新種の紫陽花に、この愛しの妻の名にちなんで「オタクサ」と名付けました。

しかしながら彼女との幸せな生活は長くは続かず、シーボルトは日本に強い思いを残しつつ強制退去させられてしまいます。

そんな日本への熱い思いを持ったシーボルトの子供たちは、父の仕事を引き継いでいきます。日本

妻タキとの子供“イネ”は西洋医学での日本初の女医となり、母国オランダでの妻との息子“アレクサンダー”は日本の外交官となります。

そしてアレクサンダーの弟“ハインリッヒ”はシーボルトが未完で残した『日本』を完成させるのです。



出島のオランダ商館（部分）



楠本お滝＝其扇



シーボルトがお滝さんの名をとり「オタクサ」としたアジサイ
シーボルト「日本植物誌」九大図書館所蔵



OTAKUSA.

楠本お滝＝其扇＝オタクサ



シーボルト妻子を描いた漆箱
提供：シーボルト記念館

6. シーボルト事件顛末記

1. 事件の発端

1) 間宮林蔵の密告

1828年（文政11年）3月28日、シーボルトから書状と包みが間宮林蔵へ届きました。間宮はこれを勘定奉行 村垣淡路守定行に届けます。間宮への書状等はシーボルトから通訳の吉雄権之助經由天文方 高橋作左衛門景保宛への私信だったことから疑惑を招き、内偵をうけました。

2) 船の座礁

1828年9月17日、シーボルトが帰国予定の船、ハウトマン号が台風で長崎 稲佐海岸で座礁し、臨検されシーボルトの荷から持ちだし禁制品が発覚し日本地図、樺太地図、葵紋の羽織、武具など多数押収。そして、このリストは早馬で直ぐ江戸へ報告されました。

3) 高橋作左衛門景保を逮捕

11月17日、シーボルトへ禁制品の入手を都合していた高橋作左衛門景保が逮捕され、自白によって、更に下河辺右衛門ほか9人も逮捕され、厳しい追及を受けました。高橋は逮捕から4ヶ月後、牢中で病死、死骸検分の後 塩漬けにされ、十日後に裁判が確定し、塩漬けのまま、斬首になりました。その他、多くの人々が厳しい処分を受けました。

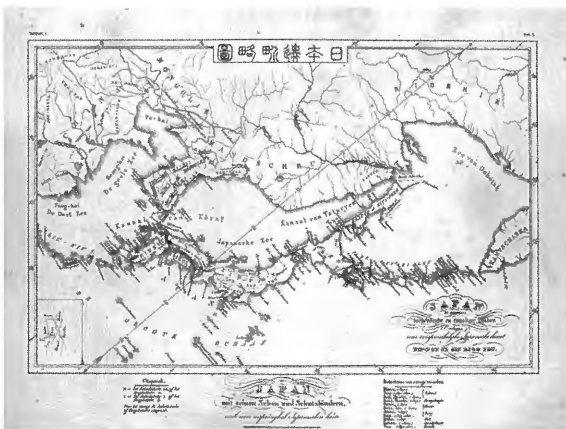
4) シーボルト追求

一方、当事者でもあるシーボルトは出島軟禁処分で長期尋問を受けましたが、上申書、帰化申請書などを提出し、日本への忠誠を表明したり、一部地図を奉行所へ返却することで奉行が軟化し、1829年10月22日、立山奉行所で「日本御構」の国外追放の判決文がだされました。

同12月30日母国へ向けて長崎港をさみしく出港しました。

事件はなぜ起きたか

- ・樺太、国後、択捉と北海道を巡るロシアの南下と探検で北方情勢の緊迫
- ・オランダ政府の情報収集政策と実証アカデミズム精神にシーボルトの探求心、好奇心が災い
- ・幕府御用学者漢学派が「蘭癖（らんぺき）」非難ムード



日本とその隣国および保護国
—日本の原地図による—

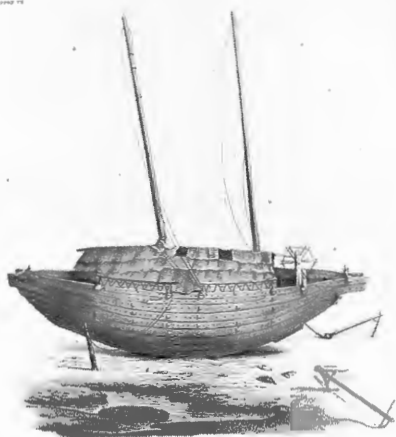


長崎湾とその近郊の地図

7. シーボルトの心残り —異国への想い—

持ち出し禁制品を持ち出そうとして国外追放を受けたシーボルトは、日本と愛する妻と子供との別れが決定的となりました。出発を前にシーボルトはお滝と娘おイネの肖像をいれた漆の箱を作らせています。1830年12月30日、シーボルトが日本を去った時、おイネは二歳八ヶ月でした。弟子の高良齋と二宮敬作の二人に子供の世話と教育をたのんで、涙を流して別れを告げました。翌日コルネリス・ハウトマン号が港を出港すると、霧の中から漁船が現れ、そこには最後の別れを告げようとする妻と娘、弟子二人の姿がありました。妻や子供だけでなく、多くの日本の友人、弟子達にも大いに心残りがあったことは30数年後再度、来訪することでも明らかです。

いまだ、心残りとして、異国への想いを『日本』の中から拾ってみました。



朝鮮 沿岸航行船



朝鮮 漁夫の一家

「朝鮮の漁船や沿岸航行船は、春に吹く強い北西風によってほとんど毎年ように日本の沿岸に漂着する。そこで日本政府は漂着した船と漂着民を、そのつど外国人に許された唯一の居留地である長崎へ送り、その地で日朝間の外交および交易をつかさどる対馬侯の保護と費用で特定の建物に収容させ、そこからふたたび対馬へ、またさらに彼らの故国へ送還させるという措置をとっている。そこで長崎では朝鮮の漁民、船員および商人が、しばしば妻子を混えた数家族で到着する光景が見られる。しかも対馬侯の交易館はオランダ商館のある出島のすぐそばにあるので、われわれはこれら朝鮮の人びとの往来や日常生活をよく観察することができた。彼らはそこで順風を待ってしばしば数ヶ月も滞在し、その間に船の修理、器具の製作などの手仕事に携わる。彼らが収容された家はたしかに粗末で、みすばらしいとさえいえるが、その代わり日本の上等な米、新鮮な野菜・魚などの食料品がそれを償ってあまりあるし、その上、誰もとがめられずに市内を自由に通行し、被災者を快くもてなす親切な日本人の家へも行かれるのだから、快適な暮らしとヨーロッパ式の贅沢の中

にしながら囚人同然のわれわれから見ると、この哀れな難破者たちがうらやましくさえある。」

—第五卷十一編 朝鮮 朝鮮漁民の絵より—



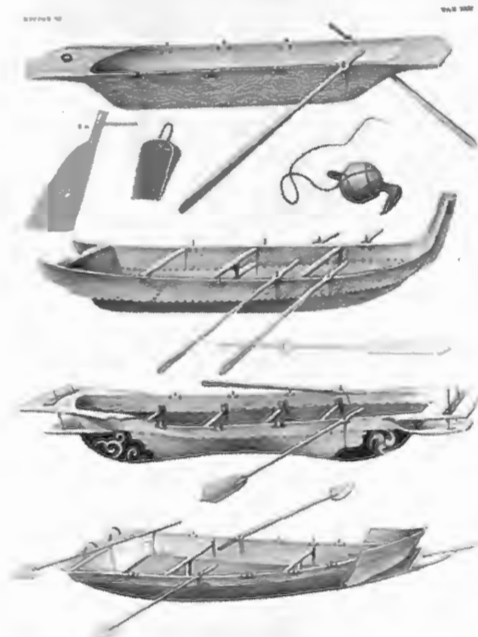
KODRÄL.
KODPLIRDEN IY SCHRISVOLK. | KATPLEPTE VYD ST HFFNYD. A.

朝鮮 商人と水夫

日本に漂着し、朝鮮屋敷に収容された三十六人の朝鮮人漁夫、商人、旅行者の中から選ばれた六人で朝鮮屋敷の監督の家での会談の図であるという。



朝鮮八道之図



JESU C. KHAPTO.
SCHIFFER V. DEUTSCHL.

蝦夷と樺太 船

御 礼

本日はご来場いただき誠にありがとうございました。

このパンフレットでは紙面の都合上、展示する図版を全て載せることはできませんでしたが、会場ではより多くの図版を準備したいと思います。

なお、福岡県立図書館と九大附属図書館との共催で別の角度からの展示を福岡市内で実施する計画も進行中です。今後ともよろしくお願ひ致します。

九州大学附属図書館（中央図書館・医学分館）

本誌編集にあたり解説文に紹介した以外、下記の文献から引用・参考にしました。

「シーボルトのみたニッポン」 シーボルト記念館

シーボルト「日本」 雄松堂

シーボルトと日本 ―その生涯と仕事 Hotei Publishing

シーボルト 板沢武雄 吉川弘文館

大日本名所図絵 第二輯 第二編

日光山志・日本名山図絵 大日本名所図絵刊行会



○公開講演会○

演 題 「日本情報編集者としてのシーボルト」

講 師 宮坂正英 長崎純心大学教授

演 題 「“再発見” シーボルト 「NIPPON」

講 師 宮崎克則 九州大学総合研究博物館 助教授

開催場所 九州大学附属図書館4階視聴覚ホール

期 間 平成16年5月15日(土)

午後2時から午後4時まで